

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
 連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



4月7日のお花見平和のつどい 2001・展示館前広場

憲法を大切に、平和をひらく

清水 鳩子

わが国は、戦争放棄の憲法をもちながら、日米安保条約のもと、首都をはじめ全国に軍事基地があります。あれだけ反対した周辺事態法は、アメリカが戦争を起こせば自動的に参戦させられるという矛盾をもった内容です。

また、現在両院では「憲法調査会」が設置され、昨年一月二十日から前文、九条をふくめ改憲の動きが急速に進んでいます。日本国憲法は、戦争の時代といわれた二十世紀最後の贈りものだと言われます。教科書検定問題、日の丸・君が代法、教育基本法改正と二十一世紀を向かえた今「新しい」戦前かと不安がつのるばかりです。

来る七月の第十九回参議院選挙は、これまでになく国民の平安をねがう強い意志表示が求められています。

私は、小学校入学が満州事変、そして日中戦争、第二次世界大戦と、学生時代を百パーセント戦争にふりまわされた世代です。楽しいはずの青春の思い出は、苦痛に満ちています。親類や友人・知人の多くを戦争で失いました。二度と再び戦争をさせてはならない、という思いが強い人間です。青春時代の経験を風化させてはならないと、消費者運動に取り組むときにも常に平和憲法のことを忘れてはならないといましてきました。

初夏を思わせるような快晴に恵まれた去る四月七日は「第五福竜丸から平和を発信する連絡会」の主催で、東京夢の島・第五福竜丸展示館前にお花見平和のつどい二〇〇一を開きました。各団体持ち寄りのトークコーナーで主婦連合会は、きたがわてつさんの曲に合わせてみんなで憲法前文を読みあいました。

東京地婦連がエンジン展示を記念して植えた「八重紅大島桜」を見上げながら読んだ「憲法前文」は、平和をねがう思いをのせて青空に吸い込まれていきました。来春もお花見平和のつどいを開く予定です。平和と福祉の民主政治を建てるために努力しましょう。

(主婦連合会副会長)



修学旅行生に説明をする平和協会の川崎会長

春の陽気に誘われ多数が来館

中学生の感想文集もとどく

三月は雪の日や真冬をおもわせる寒い日もありましたが、来館者は三二団体、六、五二二人でした。四月に入り、夢の島公園の緑もあざやかになるなかで来館者も増え、二五日までに六、二八七人、五四団体が訪れています。

四月八日には、東京・杉並区の原因被爆者の会(光友会)の三三名が来館、山村理事からビキニ事件と福竜丸展示館の今日的意義と現状についての説明をうけたのち、館内を熱心に参観しました。

◇ここで話をきいて一番驚いたことは、二〇〇〇年まで核実験が続けられていることです。久保山さんは「私を最後にしてほしい」といったのに、それがいまだに続いているなんて信じられません。

◇ここを話さずにはいられない。第五福竜丸が姿を表したのです。わたしにはとてつもなく大きく見えました。さわったら電気にふれたように感じたのを覚えています。

◇この中で話をきいて一番驚いたことは、二〇〇〇年まで核実験が続けられていることです。久保山さんは「私を最後にしてほしい」といったのに、それがいまだに続いているなんて信じられません。

◇たくさん罪のない人が被ばくし、たくさんの方が核兵器の恐ろしさを訴えているのに、それがいまだになくなっていないのはどうしてだろうと思いました。この日感じたことは覚えておくようにしたいです。

来館者ノートから (三月～四月)

◇えひめ丸事件からすぐ思い出したのが第五福竜丸でした。東京に出張がありましたので訪ねました。核廃絶の訴えを広島・長崎とともに主張しつづけたと思います。(大阪・高校教諭・T男)

◇3・1ビキニデーに生協の代表で焼津に行ってきました。きょうは、孫の入学式のため大阪からきましたのでぜひ見学したいと思っっていました。話にきくよりもごいものと核の恐ろしさに怒りがおぼえます。心から平和をねがうとともに平和運動、核をなくす運動をねばりよく進めていきたいと思えます。(大阪 M女)。

- ◇ 平和協会の活動から一
- ◇ 六月末の展示替えにむけ検討
- ◇ 展示館は年二回、六月末と十一月末に展示替えをおこなうことになっていきます。
- ◇ 六月の展示替えにむけての検討は、平和協会の川崎会長、藤田副会長、山村理事、安田事務局員によりすすめられています。
- ◇ 今回は、古くより、相当傷んだ福竜丸事件関係の写真パネルの一新と説明パネルの新たな製作、とくに若い世代が多数来館すること十分に考慮した説明を心掛けた展示の方向を打ちだしています。
- ◇ 展示館開館二十五周年記念の集いのご案内
- ◇ 第五福竜丸展示館は、来たる六月十日、開館二十五周年を迎えます。平和協会では、これを記念して以下の日時で祝賀の会を開きます。
- ◇ *日時 六月十一日(月)十八時
- ◇ *場所 日本青年館
- ◇ *会費 三千元

春の日差しをあびて

お花見平和のつどい二〇〇一ひろく

昼前から雨模様、と心配されたお天気も予報がはずれて春らしい陽光にめぐまれた四月七日、福竜丸展示館前の広場で、「お花見平和のつどい二〇〇一」が開かれました。

このつどいは、「第五福竜丸エンジン」を夢の島へ」都民運動を推進しとりくんだ事務局団体、東京



都原爆被爆者の会、主婦連合会、東京地婦連、日本青年団、東京生協連、都地域消費者団体連絡会、東京原水協に福竜丸平和協会も加わり昨年発足した「第五福竜丸から平和を発信する連絡会」がよびかけて開かれたものです。

午前十一時三〇分、勢いのよい太鼓集団「風」の演奏で開幕。東京地婦連参与の田中里子さんは開会あいさつで、「地婦連が『二十一世紀を平和の世紀に』の願いをこめて植えた八重紅大島桜も満開の中で、福竜丸のエンジンをここに展示をした都民運動が、その後、エンジンと船が一体となって新たな航海をする、それを応援しよう」と連絡会をつくりました。このつどいを成功させて、これからますますがんばりましょう」とのべました。

さまざまなコーナーで平和を語りあう



つどいは、平和のとりくみや第五福竜丸、核被害などについてバラエティにとんだ「トークコーナー」がいくつか設けられ、交流や意見交換がおこなわれました。エンジンの西側に設けられたA

コーナーでは、「ビキニ被災を受けたマーシャル島民はいま」「被爆者はいま」「高校生の子どもたちの平和像づくり」などのトークと話し合いがもたれました。

Bコーナーは、エンジンと桜の木あいだに設けられ、婦人団体をはじめ各団体の平和のとりくみを交流しあいました。

Cコーナーは、マグロ塚の前に設けられ、大石又七さんのお話、さらに福竜丸のエンジンにまつわる話を設計技師の村田正之(被爆者)さんとエンジンを製造した新潟鉄工所の常世田哲朗さんからうかがいました。

また、展示館のなかには「折り鶴コーナー」もつくられ、子どもをふくめ熱心に教わる姿もみられました。

つどいは最後に、参加者がふたたびエンジンの横の広場に集まり、太鼓の勇壮な演奏のち主婦連の清水鳩子副会長が閉会の挨拶をのべました。清水さんは、「桜が一番みどころでしたけれど来年はどのくらい大きくなっていてしょう。それに負けないくらい日本が平和で、本当に一人ひとりの人権が尊重される、そういう時代を迎えるようにがんばってまいります」と思っていますとのべて、初めての開催で準備にあたった各団体の労をねぎらいながら来年の再会を期待して散会しました。

なお、つどいには、一五〇人が参加しました。

私とマーシャル

竹峰 誠一郎

いよいよ三度目のマーシャル共和国への出発が迫っている。今回の訪問は、修士論文「マーシャル諸島共和国における核実験の影響、アイロク島にみるヒバク」の執筆のためのフィールドワークを目的にして、三か月の滞在を予定している。ホームステイをしながら、太平洋の原水爆の雲の下にさらされた島民たちの視点から、核実験の影響を調べてみようと思っている。

マーシャル諸島との出会い

私がマーシャル諸島を初めて訪れたのは、一九九八年の六月、大学四年のときだった。それは、卒業論のテーマに、マーシャル諸島の核実験を取り上げたからだ。



被災島民が住むメジャット島の子どもたち

このテーマは、私の大学生活を象徴するものであった。

私は大学時代、アジアを中心に異文化コミュニケーションなどを学んできた。同時に一年のときから「ヒバク五〇周年の日を広島で迎えよう！」と仲間と平和の旅を企画した。以来、「平和を『語り』『学び』『表現』し一人ひとりつながろう」と「アロエ会」というサークルをつくりとりくんできた。第五福竜丸の母港焼津や福竜丸展示館を訪れ、マーシャルの核実験についても知った。展示館で、マーシャル諸島共和国から核

実験のことを訴えるため来日していた方々との劇的ともいえる出会いもあった。

私は大学卒業を前に、自分の学んできた異文化関係の研究と平和のとりくみをつなげられる卒業論のテーマを探し求めた。世界のヒバク地が、植民地支配や人種差別などと密接にかかわり、先住民のもとでおこなわれているという共通項に着目した。こうしたなかで、「核実験の社会的文化的影響」マーシャル諸島をフィールドワークして」とのテーマを見いだした。

私とマーシャルの出会いは、こうした平和のとりくみのなかで築かれ、かけがえのないものとなり、私は九八年の六月に初めてマーシャルへと旅立った。

私がすすめる研究の視点

昨年大学院に入学し、今年修士論文執筆の年となり、マーシャルの核実験について以下の三点を中心にすすめるように思っている。

第一は、核実験の影響の広がりである。マーシャル諸島の四つの環礁(ビキニ、エニウェトク、ロンゲラップ、ウトリック)にとどまらない、核実験の影響は広範な

広がりをもっている。二〇〇〇年三月一日、共和国外相のアルビン・ジャクリック氏は、「核実験によりヒバクしたのは四つの環礁だけでなく、マーシャル諸島の南部や西部にも及んでいる」(Marshall Islands Journal13,2000)と演説している。核実験の影響の広がりに対応した研究ということで、アイリック環礁を選んだ。

第二は、自然環境や人体への影響にとどまらない核実験の影響である。それはより総合的で広く、マーシャル島民の社会生活の中さまざまなところに及んでいると考えている。核実験によって人々の生活、それを支える文化がどう変化させられてきたか、注目したい。

第三には、マーシャルの人々の内からの主体的変化についてである。核実験という外からの力によって変えさせられた「変化」に注目すると同時に、いま新たなうごきを見せる島民の中からの主体的な「変化」に目を向けたいと考えている。(たけみねせいいちろう、早稲田大学大学院アジア・太平洋研究科二年)